

紹介

直木孝次郎氏著「奈良——古代史への旅——」

守屋俊彦

—

奈良——そこはまことに古雅な世界である。東大寺・興福寺・春日大社などの古社寺、仏頭や月光菩薩などの素晴らしい仏像、そこに繰りひろげられる伝統的な年中行事——こうしたものが織り成すものは、まさに古雅そのものである。古都というにふさわしい。しかし、そのようなものへの期待から本書を嫌いたならば、或は失望するかも知れない。著者は日本古代史研究の権威である。従って、当然なこととはいいながら、歴史の立場から奈良を描いていられる。そういう意味においては、むしろ乾いた内容のものといえる。しかも、ここで特に注意しなければならないのは「奈良」という主題である。著者はそれによって「大和」を象徴せしめていられるようである。つまり、ここに描かれているのは、いわゆる奈良そ

のものではなく、三輪地方に初期の大和政権が出来、そこに河内から天皇家が進出し、さらには葛城や春日などの諸豪族を服従せしめ、やがて古代国家を完成してゆく過程を描いたものである。ここでは、いわゆる奈良は古代国家の完成と終末の場として把握されているのである。「古代史への旅」という副題の付いている所以である。この歴史の流れを描くために、主として記紀によっていられるのだが、記紀の歴史的記述は必ずしも正確ではない。そこで、著者は記紀に鋭い本文批判を施しながら、それを民俗学や考古学によって裏打ちしていられる。とりわけ、考古学の最新の成果がふんだんに利用されていて興味深い。新書版ではあるが、基盤に著者の古代史への深い見識があるために、内容的には大変に充実したものとなっている。ここには、本書の骨格をなしている、第一章「国つ神の里——三輪と磯城」、それに引きつづく第二章「古墳と豪族——葛城——」について簡単に紹介してみた。

第一章では、著者は三輪山を中心とした初朝大和政權と天皇家との關係についてきわめて魅力的な説を提示していられる。その主な拠りどころとなっているのは崇神紀の一連の記事である。そこには、まず「国内に疾病多くして、民死亡れる者有りて、且大半ぎなむとす。」(五年)とみえる。そこで三輪山の神を祭ることになる。

この神は天皇の楯威の根源となるものである。しかるに、天皇や朝廷の手では効果がなく、オホタタネコによってやっと鎮めることが出来たのである。オホタタネコは三輪山の神の子孫である(七年)。

また、この神と結婚した倭迹々日百襲姫命は、この神の本体が蛇であることを知って驚き、著で陰を撞いて死んでしまったとある(十年)。三輪山の神はたたる神となっている。こうしたところから、この神は天皇靈ではあるが、実は、天皇家にとって異質の神であったのではないだろうかと推測されている。それならば、もともとこの神を祭っていた者はだれだったのであろうか。ここで著者は考古学を援用されるのである。三輪山の麓には壮大な前方後円墳が群集している。とりわけ、畷行陵・著墓・崇神陵は前期古墳のビッグ・スリーといわれている。副葬品もすばらしい。崇神陵の陪塚の一つ

である天神山古墳からは二十三面の鏡をふくむ多数の遺物を出土している。そこには当然大きな政治権力を持った者を考えなければならぬ訳だが、これを崇神天皇や畷行天皇そのものとするのには疑問がある。そこから著者は三輪山の神を祭る初期大和政權というものを想定してこられるのである。四世紀の頃のことである。ところが、五世紀初頭になって河内方面から天皇家が進出し、王權交替が行われる。天皇家はこの山の祭祀権を奪い、自らの守護神とするのだが、それととも、つまりは、天皇家にとっては異質な神にすぎないのである。こうしたところから、あの崇神紀にみられるような、天皇家と三輪山の神との、密接でありながら、緊張した關係が生じてくるのである。ここには、記紀の本文批判と考古学を通して、大和における天皇家の姿が鮮やかに浮きあがらせてある。

次に第二章では、こんどは三輪山の反対側にある葛城山麓に目を向けていられる。ここには、御所・高田を中心として、宮山・築山などの中期の大古墳が存在している。また、一言主神社をはじめとして幾つかの託宣にかかわる神社がある。そこには当然何らかの家族がいたものとみなければならぬ。ところで、この豪族の範圍であるが、著者はここでもまた考古学の新しい成果をうまく利用していられる。古墳の平面プランの各部分の比率を規準にして、宮山古墳と馬見古墳群の北端にある河合大塚山古墳を比較してみると、ほ

とんと同一であるところから、この氏族が御所から河合村にかけての広い地域を支配していたものとされるのである。これが葛城氏である。この葛城氏と天皇家との関係は三輪程きびしいものではなく、いわば、同盟に近いものであったらしい。河内平野に成立した天皇家にとっては、葛城地方は後背地にあたる。従って、初期大和政権の打倒を第一目標とする天皇家にとっては、この葛城氏と手を結ぶ必要があったからである。このことを端的に語るのが雄略記の一言主神の話である。天皇は葛城山中で一言主神にあわれ、その名をよきかかれると、「是に惶畏みて白したまひしく、」と丁重に敬意を表している。このような微妙な表現の中に、著者はこの両者の勢力関係を鋭く読みとっていられるのである。しかし、この葛城氏も、結局は五世紀の後半には天皇家に服従してしまふのである。こうして天皇家が大和の諸豪族をつぎつぎと征服し、古代国家を形成してゆく過程が、第三章「后たちの墓―佐紀楯列と和爾・石上―」、第四章「神武伝説とその背景―初瀬・磐余・欽傍―」、第五章「花ひらく―飛鳥・藤原」、第六章「国家興隆のかげに―斑鳩・平群・二上山」、第七章「都の明暗―平城京―」と手際よくまとめられている。そして最初のところに、国見の儀礼を例として、記紀の本文批判について述べた序章が付いている。

このように本書は歴史の流れを客観的に記したために乾いた内容

のものになっている。そこで、あちこちに記紀歌謡や万葉集の歌をちりばめて色彩が添えてある。ぎっと拾ってみても、序章―記三一、四二、第一章―万一八、五六七、二九、記五九、といったぐあいである。しかし、これらの歌はたんに色彩を豊かにしているばかりではなく、その歌を踏台にして、さらに歴史的なものに展開させている。例えば、第一章の冒頭には額田女王の有名な歌、「三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなも隠さふべしや」(万一八)が掲げられている。ここでは額田女王がなぜそれ程までに三輪山に執着したのかという疑問から出発して、それは大和の聖なる山であり、天皇靈と密接な関係があったからだとし、そこから初朝の大和政権や、それと天皇家との関係などを引きだしていられる。また、第二章では、河内の天皇家と葛城氏との関係を語るものとして、「やすみしし我が大君の遊ばしし 猪の病猪の 喰き畏み 我が逃げ登りし 在丘の 榛の木の枝」(記九九)を引用していられる。ここに登場している猪は葛城の山の神であり、葛城氏の斎くものである。それを雄略天皇が恐れて木に逃げ登ったというのは、天皇家が葛城氏の勢力を尊重しなければならなかった現実を示すものとされている。文学と歴史とがそれぞれに響き合うような形で論が進められていて美事である。

著者は本書を古代史への案内記とされている。案内記といえ、どうかすると通俗におちいり易い。しかし、本書はそのようなものではなく、古代史学の最新の成果が取りいれられていて、きわめて学術的水準の高いものである。ところで、古事記は文学的性格の強いものではあるが、歴史と密着している。従って古事記を文学として研究する場合にも、その歴史を抜きにすることは出来ない。万葉集は純粹に文学作品ではあるが、これとてもそれを生んだ歴史的背景を考えない訳にはゆかないだろう。その点本書は古代文学を研究する者にとってまことに有益である。なおいわば、本書では、今述べたように歴史の展開を描くために、万葉集などがしばしば使われ、文学と歴史とを結ぶ一つの方法が示されていて参考となろう。

しかし、著者の対象は、自ら案内記といわれているように、矢張り、一般読者にあつたのであろう。近時、大和は観光ブームのさ中にある。しかし、そこには奈良など一、三の場所を除いては、みるべきものは何もない。山があり、川があり、田圃があるにすぎない。すべては地下に埋まっている。そこに古代を描いてみるためには、こうした風景の上に、記紀や万葉集などをかぶせてみる必要がある。大和路を散歩する際、本書を繙いたならば、古代への幻想は一層正しく豊かなものとなろう。是非一読をおすすめしたい。地図

や写真や見学案内まで付いていて便利である。

本書はこのようにきわめて充実した内容のものではあるが、その全体的な構成などについて一、二希望を述べてみたい。その一つは河内王権についての説明をして置いただけだということである。それは著者の学問的立場であり、古代史学界では常識的なこともわからないが、河内の天皇家が三輪や葛城などへ進出してきたことをいきなり述べられたのでは、専門外の者にとってはやや理解しにくいところがある。それが本書の前提となっているのだから、序章あたりでその輪郭なりを描いていただけたら、一層よかつたのではないだろうか。ついでにいえば、河内にいた者がなぜ大和に進出する必要があつたのかという点などにもふれていただけだと思ふ。今一つは第四章以下の記述がやや簡略だということである。新書版という制約されたものだから、すべてを望むことは無理かも知れないが、第三章までが詳細であつただけにやや物足りない。今少し肉付けしていただけたらと思う。それとともに、第三章までのところとの内容的な結び付き、さらにいえば、これらすべてのものが奈良という一点に流れこんでゆく歴史的な道筋を今少し説明していただけたらありがたいという気がする。本書がまことにすぐれた内容のものであるだけに、専門外の者から、幾つかの希望を述べてみた次第である。(岩波新書一九七一年四月刊 岩波書店)